

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

イチゴにおける微小害虫（ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類）の発生状況と防除対策（技術情報第16号）について（送付）
このことについて、下記のとおり取りまとめましたので業務の参考としてご活用ください。
記

2月の巡回調査においてハダニ類、アザミウマ類及びアブラムシ類の発生が前年・平年に比べ早い時期から増加しています。
今後気温の上昇に伴い、さらに増加することが予想されますので、注意が必要です。

1 発生状況

- (1) 2月の巡回調査におけるハダニ類の発生は、寄生葉率が18.3%（平年20.7%）で平年並の発生であったが、1月から2月間で平年より大きく上昇している（図1）。また一部において発生の多いほ場がみられる。
- (2) 2月の巡回調査におけるアザミウマ類の発生は、寄生株率が16.3%（平年5.3%）で平年比やや多の発生であった（図2）。
- (3) 2月の巡回調査におけるアブラムシ類の発生は、寄生株率が1.3%（平年0.1%）で平年比やや多の発生であった（図3）。
- (4) 福岡管区気象台が3月4日に発表した九州北部地方1か月予報によると、気温は平年より高い予想であり、イチゴにおける本虫発生に好適な条件が続くと考えられる。

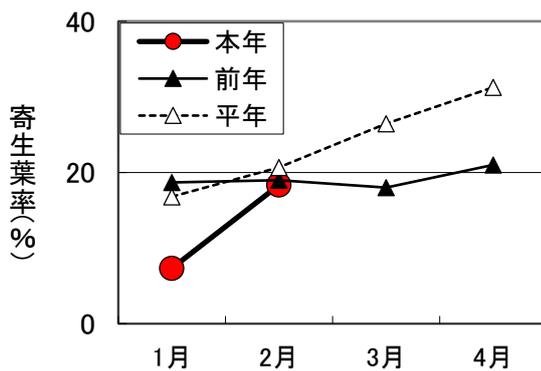


図1 ハダニ類の寄生葉率の推移

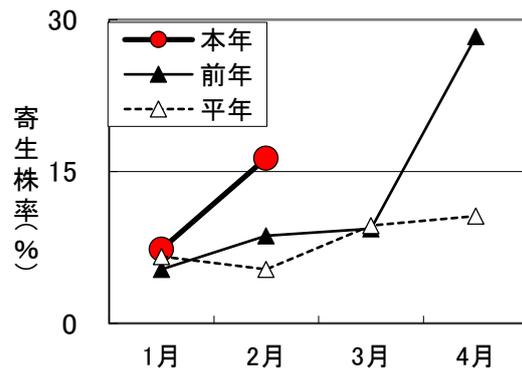


図2 アザミウマ類の寄生株率の推移

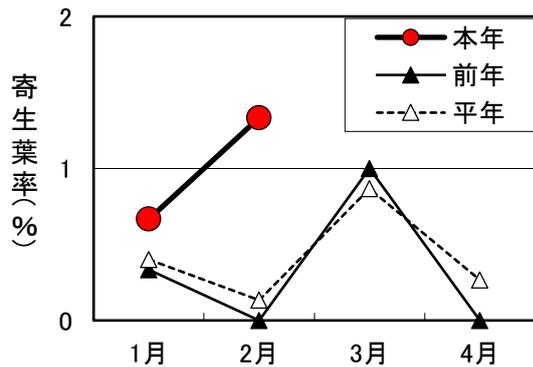


図3 アブラムシ類寄生葉率の推移

2 防除対策

(1) 微小害虫共通

ア 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉は、ポリ袋に詰めるなどして速やかにほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

イ 薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏にも十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。

ウ 未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、微小害虫が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。

なお、親株ほ（育苗ほ）については微小害虫を持ち込まないために、管理作業は最初に行う。

エ 薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、散布日は巣箱を移動させるなどして危害が出ないように使用する。

オ 農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守して農薬の安全使用に努める。

カ 施設内および周辺の雑草は、発生源となるので除草し、施設内の観賞用の花き類も撤去する。

(2) ハダニ類

ア 使用できる殺ダニ剤が少ない場合には、気門封鎖剤を活用する。

気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が無いため、7日程度の間隔で複数回散布する。

なお、薬害を生じやすい剤もあるため、ラベルなどで使用上の注意事項を確認した上で使用する。

イ カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用し、ハダニ類の密度を抑える。

ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。

(3) アザミウマ類

ア 早期発見のため、施設内に青色粘着トラップを設置し、成虫の発生を確認する。

また、開花中の花を白紙上で軽く叩くか、軽く息を吹きかけ、成幼虫の寄生を確認する。

- イ アザミウマ類成虫の発生が多い場合は、アザミウマ類の防除を優先し、アザミウマ類成虫に効果の高い薬剤を選択する。その場合、ハダニ類の天敵（カブリダニ）にも大きく影響する可能性があるため散布後、ハダニ類の増加に注意する。
- ウ 天敵を利用していないほ場の場合、発生初期は、幼虫に効果のある剤（昆虫成長制御剤等）を使用する。
- エ 多発生した場合は、薬剤の散布間隔を短くし（約5日）、系統の異なる薬剤をローテーションで複数回散布する。

(4) アブラムシ類

- ア ワタアブラムシは吸汁によるウイルスの媒介や排出物による葉や果実のべとつき、汚れをもたらすため、発生に注意し、発生初期の防除を徹底する。
- イ ワタアブラムシについては薬剤感受性の低下した個体群も見られるので、薬剤防除にあたっては、同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

熊本県農業研究センター 生産環境研究所
病害虫研究室 予察指導係
(病害虫防除所)
担当：丹、中村 TEL : 096-248-6490